

社員をはじめグループ会社全体で 小さな改革を積み重ねてチーム力を強化

中京テレビ放送（名古屋市中昭和区）は十一月、名古屋駅地区の「ささしまライブ24」へ社屋を全面移転する。昭和四十四（一九六九）年に開局して以来、ほぼ半世紀ぶりの「第二の開局」を迎える。中京テレビの社長に六月、就任した小松伸生社長に、新天地での再出発への意気込み、経営方針、事業の展望などを語ってもらった。

——社長就任の心境、社員に伝えたことは。

小松 社長になった方はどなたでもそうでしょうが、一番感じたのは責任の重さですね。社員には就任三日目にあいさつさせていただき、改めて思ったのは、この人たちに對して責任があるんだな、ということ。会社組織ですから、当然トップに責任はあるわけで、株主総会では株主の方々、視聴者

の方々に対して感じましたが、社員ははじめに二〇年、三〇年と勤めていきますからね。責任の意味には二つの面があります。社長の思い付きで下手なことをやってもいいけないが、リスクを考えながら、チャレンジもしなくてはとも思いました。いわば、守りと攻めの両方に責任があるのだと痛感しましたね。

——名古屋住まいはどうですか。

か。

小松 三年前に日本テレビから来て、名古屋は初めてでしたが、家族から離れて単身赴任したのも、初めてでした。ずっと東京育ちで、都会の魅力は捨てがたいものがありますが、東京は大き過ぎて、疲れるところもあります。その点、名古屋は疲れないサイズで、都会の味わいがあり、都心から少し離れると、自然がいっぱいあり、温泉もいいところがあります。名古屋に住んで、逆に東京が特殊な街だったと、思いましたね。

——名古屋駅地区・ささしまライブの新社屋に移転します。新たなスタートに当たっての抱負を。

小松 一番大きいのは、意識

は。

小松 例えば、事業はリスクもありますが、うちの強みでもあります。先ほど「デイズニー・オン・アイス」に触れましたが、これはもともとアメリカから招へいして三〇年続けており、そこから全国へ展開しています。中京テレビのイベント事業部門が培ったもので、グループ会社の中京テレビ事業とともに運営もやっています。こうした個別のグループ会社も一つの建物に入り、連携が強化されます。新社屋のあるささしまライブでは今、名古屋市の公園が整備されていますが、そこでのイベント展開もぜひやっていきたい。また、あそこは運河の堀留という形になっていますね。

——中川運河ですね。

小松 そうです。公園を市民の憩いの場所にしようということと、運河がずっとつながっている。先には名古屋港がありますよね。途中には、大型商業施設として計画されている「ららぽーと」もあります。そこに船着き場も設置予定です。ささしまライブから遊覧船

ざるを得ない所は、真ん中に階段を設置して、すぐに行き来できるようにになります。これまでお互いの距離が遠いことへの飢えのよう

なものがありましたので、仕事に取組む姿勢を変えるには期待通りの、いい形に仕上がっていると思います。

組織の意思疎通を図り人と人との協力体制を

——新拠点は組織の意思疎通を図りやすい？

小松 そうですね。人と人との

協力体制がとりやすいですね。物理的な条件は整いましたから、さらに協力を加速するようにしていくかなければと思います。必ずしも耳障りのいいことだけでなく、言いにくいこともきちんと言う。それが本当のコミュニケーションです。そういう文化を創っていききたいと社員の皆さんにも話したところ。イエスマンはいらない、下の人、特に若い人の意見も聞いていくように、局長、部長はそういうメッセージを発信してほしいとも、お願いしました。実行されると、一層仕事をやりやすい環境になっていきますからね。

——具体的な事業展開



——具体的な事業展開

が出ていきますが、パナ運河のような水位調整の面白い区間がありますね。単に、水辺空間があるだけではありません。すぐにはできないにしても、運河を通して港につながる、文化地域へと発展するロマンがあり、そのスタートラインがささしまライブという場所であるともいえます。いわば、点から線、線から面的な展開に、お役に立てればと思っています。

——新社屋の特徴は。

小松 スタジオの数はこれまでと同じですが、より広くなります。一番大きいスタジオは名古屋で一番広いものになりますね。高さもありますし、機能的にも照明やコンピュータ制御などは最新機器を入れていきます。より合理的な撮影収録ができるようになりますね。

——キー局の出身ですが、歴史ある中京テレビにさらに新機軸を打ち出す考えは。

小松 そうですね。華々しい、ドラスティックな改革を一気にやるということはありません。大きな改革ではなく、小さな改革をしようという社員